

人間が守るべき道徳規範についての考察

—進化論から倫理を考える—

浦野聖也（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：規範倫理学、進化論的倫理学、生物学的利益、ミーム

序文

本論文は、進化論という視点を取り入れて人間の道徳規範について論じることを目的としている。すなわち、人間とはどのような特性をもった生物か、という点から、人間が守るべき道徳規範を考察するということである。このような学問分野は「進化論的倫理学」(evolutionary ethics)と呼ばれる。

なぜ道徳規範を考える際、進化論が重要になるのか。それは、道徳規範として私たちを拘束する「べし」は、「できる」を含意していなければならないからだ。どのようなルールであっても考えることはできるが、それが実質的に意味を持つためには、そのルールを守ることができなければならない。そう考えたとき、進化論の考えを取り入れて、人間がどのような生物なのかについて考慮することが非常に重要となる。

第一章 進化論的倫理学の誕生と挫折

進化論的倫理学の考えはもともとダーウィンに端を発する。彼は人間の道徳感覚や社会的性質が自然淘汰によって身についたと考えた。なぜなら、他人と協力し合う個体グループはそうでない個体グループよりも適応的だからだ。彼の考えは同時代のスペンサーなどに受け入れられ、19世紀に広まった。しかし、19世紀の進化論的倫理学—古典的進化論的倫理学—は、重大な問題を抱えており、挫折した。たとえばスペンサーは、進化の促進こそが善であると考えた。彼にとって善とは快楽であり、より進化した存在は、より大きな快楽を享受できるからである。これは快楽あるいは進化と、善という価値とが強く結びついているという点で価値の实在論である。この点を批判したのがムーアであった。彼は、「進化（実は進歩）」あるいは「快楽」と「善」そのものが同じ性質とすることは「自然主義的誤謬」という誤りを侵していると批判した。進化や快楽の中に「善」と呼べるものがあっても、それらは「善」そのものではないのだ。この批判に耐えることができず、古典的進化論的倫理学は廃れていった。

第二章 生物学の新たな知見

古典的進化論的は廃れたが、20世紀の新たな知見を受けて、進化論的倫理学は形を変えてよみがえる。この章では新たに発見された生物学的な知見を紹介する。

前提として、自然淘汰は遺伝子を単位として行われているという理解が必要となる。自然淘汰の基準となるのは個体でも種でもなく、遺伝子である。すると第一に見えてくるのが、「血縁淘汰」という傾向性である。たとえば、子どもを育てること、兄弟姉妹に対し利他的にふるまうことは、自分という個体にとっては不利益だとしても、自分の持つ遺伝子をより多く残すためには有効であり、よって自然淘汰によってこの傾向性は広がっていくのである。

第二に「相互的利他性」がある。これは「助けてくれると期待できる者を助ける」というものである。自分が見知らぬ相手と出会ったとき、初めは協力する。相手がお返しをしてくれればそのまま助け合う。しかし、相手がお返しをしてくれなかったときは自分も協力をやめる。その後相手が助けてくれたら、自分も助けるようにする。この戦略は実際の動物にも見られ、また、コンピューターによっても有益な戦略であることが確認されている。現代の進化論的倫理学者は、これら二つの傾向性を道徳の起源と考え、持論を展開している。

第三章 新たな進化論的倫理学—反实在論

現代の代表的な進化論的倫理学者にマイケル・ルースがいる。彼は、人間を、遺伝子によって決められた一定の範囲の行動性向の中で行動を選択・決定している存在とした。さらに、道徳にかかわる傾向性は人間にとって特に重要であるため、義務感覚という形で備わっていると考えた。つまり、ルースにとって道徳は実在的なものではなく、人間が共通もっている「集団的幻想」なのである。こうした道徳が進化によって獲得される必然性はなく、したがって道徳の究極的な根拠、つまりその正当性—道徳に従わなければならない理由—を問うことはできない。ルースは自然主義的誤謬を受け入れ、価値に関して反实在論の立場をとる。

彼は自身の考えを、同じく反实在論の立場をとるマッキーの立場と近いと述べているため、マッキーの立場を採用して正当化を試みることができる。マッキーは人間の本質を利己的なものと考え、他者との葛藤や競争を解決するために道徳規範が必要と考えた。よって、正当な規範とは、それに従うことによって各人がより大きな利益を得られるようなものである。マッキーの立場を採用しても道徳の究極的な根拠は問

えないが、目的—手段の関係を考えることによって手段としての正当性は問えるようになる。

また、功利主義の観点から目的—手段による正当性を試みる進化論的倫理学者として内井惣七が挙げられる。彼はヘアを援用しながら、進化論的倫理学を論じる。ヘアの二層理論と普遍化可能性の考えを用いることによって、合理的に考える人は誰でも受け入れざるを得ない普遍的指令を想定することができるのである。そして、功利主義的な規範に従わなければならない理由は、そのような規範に従うことが、長い目で見れば最も自分の生物学的利益を大きくするからである。ルース=マッキーの考えと内井=ヘアの考えは、いずれも生物学的利益という目的を達成するための手段として道徳的規範を正当化しており、共有する点が多い。しかし、規範の明示性、公平性などの理由から、本論文では後者に主眼を置いて論を進める。

しかし、内井=ヘアの立場を採用した場合に問題となるのが、普遍化可能性である。マッキーは、ヘアが単に論理的性質とする普遍化可能性が、実質的な道徳を前提としていると批判する。内井もシジウィックを援用し、論理的性質だけでは善の重みづけという数的・量的な普遍化まで導くことはできないと認める。それでは内井はどのようにこの問題に対処したのだろうか。

第四章 「信頼」の道徳——もう一つの内井理論

内井は最初から普遍化可能性を前提とすることをやめ、初めは自集団内で限定的に働いていた「普遍化」が、徐々に広がっていったという考えをとる。その際に重要視するのが山岸の「信頼の『解き放ち』理論」である。騙されることを恐れて同じ相手としか付き合わない人は、付き合いを広げることのできたはずの利益を放棄することになり、機会コストを支払うことになる。機会コストが大きいとき、利益を大きくするという理由から、狭い関係を脱してより広い関係を持つことが正当化される。つまり、自分の生物学的利益という観点から、「普遍化」を拡大することが正当化されるのだ。また、裏切る可能性のある人も信頼し、付き合いことは騙されやすいことを意味していない。むしろ逆である。信頼によって関係を広げようとする人は他者の信頼性にかかわる情報に敏感になり、騙されにくくなるのである。

また、内井は合理性に関して、「改善」という視点を取り入れる。私たちは現実には完全に合理的に行うことはできない。しかし、その都度局所的な最大化を通じて合理性を改善し、完全な合理性に近づくことはできる。以上のように、新たな内井の説は、「普遍化」に関しても合理性に関しても改善によって徐々に拡大、最大化に近づけていこうというものである。そして、それらが正当化されるのは、生物学的利益の最大化という目的に最もかなった手段だからである。

第五章 ミーム—もう一つの自己複製子と内井理論の関係

内井の理論は生物学的利益の最大化を論拠としていた。しかし、人間が追求しているのは生物学的利益だけではない、とする進化論者もいる。たとえば、リチャード・ドーキンスは人間に特有な自己複製子として「ミーム」を想定した。これは人間の心を媒介にして増殖する文化的自己複製子であり、広い意味での模倣によって増殖する。ミームと遺伝子は独立しており、それぞれが人間に影響を与える。また、人から人だけでなく、本や芸術、コンピューターなどものを介して広がっていく場合もある。

では、ミームを想定することで内井の理論は破綻するだろうか。確かに内井は遺伝子しか理論に組み込んでいないので、ミームによって内井理論は不十分ということになりうる。しかし、ミームを認めたとしても遺伝子の影響を完全に無視することはできない。また、ミームが増殖するにはそもそも媒介となる人間が必要である。以上の理由から、ミームを想定する際にも、遺伝子の視点から考えることが必要であることが分かる。また、「誰でも守ることができる」道徳規範を考えるという目的からも、生物学的進化によって得た、すべての人間が持つ傾向性を考慮することが必要となる。したがって、ミームを想定したとしても、依然として内井理論は有効に機能するといえる。内井理論を考慮したうえで、遺伝子とミームとを調和させた規範を考えていくことが求められるだろう。

結論

道徳は人間を超えた視点では実在せず、利益を目的として、進化の中で与えられた戦略である。そこで正当とされる規範は、利益を得るための手段として最も優れているものである。そして、私たちが合理的である限り、道徳規範は拘束性を維持する。ミームという自己複製子の考えを取り入れるとしても、この理論は機能し続ける。もっとも、その場合は遺伝子とミームとを調和させた規範というものを考える必要があるだろう。ミームという新しい視点は、人間において幅をもった規範を考察する役割を果たすと考えられる。

進化論的倫理学は、人間のもつ性向や傾向性を考慮したうえで、「誰もが守れる」道徳規範を導くことができる。ここでの規範はただ思弁的に導かれたものではなく、現実的な実行性を持っている。人間が守るべきルールについて考えるとき、倫理学だけではなく、生物学をはじめとする科学、社会学、文化人類学、心理学などの領域の視点が必ず必要になる。

主要参考文献

- ・ マイケル・ルース、「進化論的倫理の擁護」、マルク・キシユ編、松浦俊輔訳、『倫理は自然の中に根拠をもつか』、産業図書、1995年、27-62頁。
- ・ 内井惣七、『進化論と倫理』、世界思想社、1996年。
- ・ R.ドーキンス、日高敏隆 他訳、『利己的な遺伝子』、紀伊国屋書店、2011年。